

シートベルトに 救われた命

夏も終わりに近い田舎道の夕方、心地よい風が吹き、日の長いのを良いことに私は、隣の郡の友人宅へ「栗の実」を届けにいく途中でした。

それは平成二年九月二十六日午後五時過ぎのことです。五時のサイレンを聞いた後、車を運転して家を出発し、県道へ出ました。

左方には稲田が広がり、小川の向こうは県道より幅広い二車線の町道があります。私の車の前後にも対向車線にも車はなかったのですが、私は、ゆっくりと車を走らせました。

昔ながらの幅の狭い県道と幅の広い町道がTの字型につながっている場所にさしかかりました。対向車が直進してくれば下り坂、私の方から行けば上り坂で、左側の橋の欄干のところまで直ぐ町道とつながっており、その先は山の法面で緩やかなカーブになっていました。道幅は四メートル位、右側にはガードレールが設けられ、下の河川敷にも目隠しのようになった竹と木が生えており、以前から小さな事故が何回も起こっていると

聞いていました。

まさか、私がここで重大事故に遭遇するとは、予想もできないことで、今でも、なぜ…と信じられません。一台の茶色の箱型の乗用車を目にしたのは橋に掛かるか掛からないときで、その直後、瞬きをする間もなく白い影が目に入ったと同時に、「アーツ」という声を耳にしました。瞬間的に何が起こったのかわかりませんでした。

気が付いたときは、自分の車は停止し、前方に一台の白い車が行く手を遮るように止まっていました。フロントガラスの向こうでは、鼻血を出して顔を手で拭うような姿の男性、それは小学校時代の六年間、同じ教室で学んだ人です。鼻柱を打ち苦しそうでした。

人影もないし、あいにく車も来ません。百メートル位先に車が止まるのが見えましたが、係わりたくないのか、直ぐ発車して立ち去りました。電話をかけたようにも近くに民家もありません。

私は、思い切り大声で

「一一〇番、一一九番、救急車に電話して！」と助けを求め、何度も叫びました。そのうち呼吸が苦しくなり、背骨がバ

ラバラになるかのような痛みを覚え、車に戻りシートを倒して横になりました。その時は、「死」を覚悟しました。

時の経過は分かりませんが、だんだん人が集まってきて、車の窓越しに

「大丈夫ですか」と声を掛けてくださいました。いろいろと手配をして、力付けてくださった方々には、今でも感謝の気持ちで一杯です。

救急車も来て、相手方を運ほうとしましたが、

「貴女のほうは、怪我はどうですか」と声をかけていただいたときは全身の力が抜けたようになりました。しかし、気持ちもやっと落ち着き、痛みもそれ程感じなかったので現場に残り、自分の事故車の撤去の手配をしました。

相手の車は職場の公用車であり、すぐ同僚の方が来られました。現場整理の手はずも整い、また警察官の現場検証等もありました。私には、すぐ頼りにできる者が居なく、心細さに泣いても泣けぬ事態でした。

現場に来られた相手の同僚の方の中には「お互いに独り者だから、ちよつとぶつかって見たかったな」等、冗談さえ出していました。

しかし、相手の車の中を見たときハンドルの軸は折れ、ワイパーのレバーも折れて上向きとなっておりました。相手の車の外廻りはバンパーが大きく大口をあげエンジンは掛かっても前進出来ない状態でした。

当日は、夜も遅かったため病院に診察に行く時間も、入院された方の様子を聞くことも出来ませんでした。翌朝、職場に電話して病院での結果を聞き、事の重大さに驚いてしまいました。

「昨日九時頃から今朝四時まで手術があり、輸血を必要とした。腸は二メートル摘出し、肝臓も痛んでいる。明日が山場だろう」と返事が返りました。

すぐお見舞いにも思いました。が、付き添われる方のご迷惑を考え、夕方、上司と病院に行きました。付き添われるお兄さまご夫婦から

「会ってやってください。」と静かに言われたときは、張り詰めた胸に熱いものがこみ上げてきました。病室に入ると想像以上のKさんの姿に涙も忘れ、絶句し、お兄さまの心の中は察するに余りあるところでした。

大勢の方の献血のいかにもなく事故後三日目の早朝、Kさんは老父と二十歳前後のお二人のお

子さまを残して他界されてしまいました。私は、その日のお通夜と翌日の葬儀に参列しましたが、ご家族は、静かな対応をしてくれました。事故の状況がどうであろうと、失われた「命」の大きさは計り知れません。

静かに対応してくださるご家族に對し、私は、言葉を忘れてしまいました。

三年前の九月にお母さんを亡くされ、三回忌の通夜に、今度はお父様とも御仏壇に祭らなければならぬお子さまの悲しみは、他人には分かるすべもありません。

私は胸部打撲、頸骨鞭打、胸骨骨折等で六週間の治療を要する状態でしたが、今では、痛みもなく、元気にいろいろな地区内のお世話をさせていただいています。私の命は、「一本のシートベルト」で守られたのです。

毎朝、仏壇に手を合わせ、生命ある日々を大切に祈り、生きていくことを喜び、感謝しています。「生命」は自分のものであって、自分のものではありません。大自然からお借りした大切な宝物ではないでしょうか。交通事故防止、お互いが注意しあって、限りある「生命」を守っていききたいものです。